

解答

- ① 1 加わる 2 成功 3 号令 4 共学 5 民族  
6 前兆 7 改札 8 灯台 9 風雲児 10 小包

- ② 問一 1 ニ〔画め〕 2 三〔画め〕 3 四〔画め〕  
問二 1 全く 2 軽やかな 3 直ちに 4 少ない 5 光り  
問三 1 ウ→オ→ア→エ→イ 2 ウ→イ→ア→オ→エ (1・2それぞれ5つくんで)  
問四 1 イ 2 ウ 3 イ 4 イ

- ③ 問一 ウ  
問二 人間の社会の進化的な起源を知るためには、ヒトと近縁なサルの研究が必要だと考えたから。  
問三 母系社会 問四 人間以外の動物にも文化がある〔こと〕  
問五 A 血縁 B 遊び友達

- 問六 A 汚れを落とす B 真水 C 塩味をつける D 海水 問七 ア  
④ 問一 1 ア 2 エ 3 イ  
問二 太陽のうごき・月のみちかけ・星のうごき (3つ不順可)  
問三 いつも川がはんらんして、こう水になる前に、地平線にあらわれる、きまった一つの星。  
問四 A 惑星のうごきをしらべる B 恒星 C 星座  
問五 ア 問六 ア 問七 ウ

解説

③ 出典は、松沢哲郎「進化の隣人 ―ヒトとチンパンジー―」(岩波書店)。

問一 傍線部①の直後に、「常にその学問のフロンティア(先頭を走る人)だった」という意味で、きわめてユニークな学問だと思えます。その背景には(7・8行め)とあります。この傍線部①とはほぼ同じ意味です。したがって、「その背景には」に続く内容、「日本という国が先進諸国の中で唯一、サルが住む国だということ」が、傍線部①の背景であると理解できます。冒頭の「日本は一般の方々がサルのことをよく知っています」という自然的・文化的背景が、『日本の霊長類学』というものをきわめてユニークなものにしてきた(1～3行め)にも注目しましょう。

問二 傍線部②の直後に、「人間の社会の進化的な起源を知りたい。そのためにはヒトと近縁なサルの研究が必要だと考えた(12・13行め)とあるので、この内容を「人間の社会の進化的な起源を知るためには……」という形でまとめます。

問三 「社会」という言葉に注意しながら読み進めると、「その結果、～サルの社会や暮らしがわかってきました。」(20行め)という一文が見つかります。この一文からはじまる段落で、サルの社会は「オスの子どもは四～六歳ころに、生まれた群れを出てよその群れに入り」、メスが「生まれた群れに残る」という、「母から娘へと連なる母系社会」であると説明されています(23・24行め)。

問四 「ニホンザルの芋洗い」の研究について書かれているのは、26～38行めです。「二つの経路で」芋洗いが「群れの中に広ま」ったこと(問五)、「伝播の過程で芋洗いの行動が変わって」いったこと(問六)を説明した上で、そのまとめとして「幸島のサルの芋洗いは、『人間以外の動物にも文化がある』と

いうことを示した」(37行め)と筆者は述べています。「文化」とは、ある集団に属する人々が共有している一定の特性のことです。つまり、あるものが集団の中で人から人へと伝えられていくことであり、それは、「伝言ゲーム」のように、伝えられていく過程で変化することもあります。そのような意味で、「芋洗い」は、「イモ」の属する集団の中で広まり、変化していった「文化」であると言えるのです。

問五 「経路」(道すじ)とは「芋洗い」がどういう関係で群れの中で広まったのかということです。「ひとつは血縁」(31行め)から広がり、「もうひとつは遊び友達」(32行め)から広まっていきました。

問六 傍線部⑥の直後に、「最初は真水で洗ってたのですが、海までもって行って海水で洗うようになりました。また砂にまみれていない芋を、わざわざ海水にひたして食べるようになりました。汚れを落とすためから、塩味をつけるためへと変化したのです」(34～36行め)と書かれています。

問七 アは「霊長類学は～日本だけで研究されている」が×です。「霊長類学に關していえば日本が世界に向けて発信してきました。常にその学問のフロントランナーだった」(7・8行め)とはありますが、日本だけが研究しているわけではありません。イの内容は、22・23行めに書かれています。ウの内容は、26・27行めに書かれています。エの内容は、38・39行めに書かれています。

④ 出典は、石田五郎「星ものがたり」(講談社)。

問二 傍線部①をふくむ一文をよく読みましょう。「大むかしの人々の生活にとって、太陽のうごきや月のみちかけ、星のうごきは季節や天候を知るうえで、とても①たいせつなものでした。」とあります。「大むかしの人々の生活にとって」、「季節や天候を知る」ために、「太陽のうごき」と「月のみちかけ」と「星のうごき」は、とても「たいせつなもの」だったのです。

問三 傍線部②には「この星」とありますから、前の部分で「星」について書かれているところはないかさがします。「あるとき、きまった一つの星が地平線にあらわれるころになると、いつも川がはんらんして、こう水になることに気がつきました」(5～7行め)とありますから、この部分を使います。「～星。」という文末になるように、「川がはんらんして、こう水になる」前に(ころに)「地平線にあらわれる」「きまった一つの星」、というふうに言葉の順番を入れかえてまとめます。

問四 地球上の自然現象は天界でおこるできごとが関係していると考えた人々は、太陽や月、惑星をくわしくしらべるようになりました。しかし、「惑星のうごきをしらべる」(15行め)には、なにか「目じるし」が必要でした。そこで考え出したものが、「いつも形をかえない恒星をえらび、いくつかのグループにわけた「星座」でした(16行め)。

問五 「現代」の「星うらない」について書かれている部分をさがします。35～37行めに「科学ではわからない人間の神秘的な未来の運命を、なんとかして知りたいという人々の気もちが、むかしもいまでも、星うらないを魅力的なものにしているのかもしれませんが」とありますね。このような気もちがあるため、「いま」でも「星うらない」は多くの人びとにとって「魅力的なもの」であり、世界中で行われているのです。

問六 空らんの直前には、「英語で運のよい人のことを『かれは幸福な星の下に生まれた。』』といます」とあるので、人間の運の良さ(…運命)と星の結びつきについて説明している〈ア〉が適切です。

問七 「上流社会の貴族や僧侶だけでなく、いっばんの人々のあいだにも星うらないはひろまっていきました」(31・32行め)とあるので、アは適切です。「宮廷ではおほかえの占星術師をやとうようになりました。王さまは、政治や戦争など国の運命にかんすることを、うらなわせたのです」(28～30行め)とあるので、イは適切です。「星うらないは～さらにインド・中国など東洋の国にもひろまっ」(24・25行め)とあり、これにウの内容は合いません。「人間それぞれの性格や～未来の運命もきめるものだと考えるようになりました。これが星うらないのはじまりです」(19・20行め)とあるので、エは適切です。